

英語比例比較構文「the + 比較級…(,) the + 比較級…」について

高橋 順一

抄録：英語比例比較構文（例 The more you eat, the less you want.）は、現代英文法においては周辺の言語現象として扱われ、中心的取扱いとその存在理由についての明確な説明は少なかった。一般に、この構文は、独立変項と従属変項の相関関係を表すために用いられる。本稿では、伝統文法、アメリカ構造言語学、生成文法、認知言語学における比例比較構文の事例とその文法的説明の概要を概観し、英語比例比較構文が人間言語の本質に関わる知見を与えてくれることを明らかにする。

1. はじめに

構文 (constructions) は、伝統文法、アメリカ構造言語学、生成文法、認知言語学において、重要な研究対象とされ、これまで様々な言語事実が明らかにされてきた。どの時代においても、受動態、二重目的語構文、同族目的語、存在構文、命令文、疑問文、強調構文・分裂文、繰上げ構文、話題化、外置構文、分詞構文などの「中核」となる構文が主要構文として多く採り上げられ、「周辺」とされる構文は話題に上ることは少なかったように思われる。本稿では、「中核」と「周辺」の間には本質的な区分はなく、「周辺」とされる言語現象にも、人間言語の本質にかかわる重要な知見があることを「the + 比較級…(,) the + 比較級…」の構文によって明らかにしたい。

2. 構文とはなにか

これまでの言語研究において、Construction がどのように定義され、どのような言語事実が扱われてきたかを概観する。まず、Crystal (2003) の Construction の項目をみる。

Construction (n.) (1) In its most general sense in LINGUISTICS, 'construction' refers to the overall process of internal organization of a GRAMMATICAL UNIT—a SENTENCE, for example, being built up (constructed) out of a set of MORPHEMES by the application of a set of RULES. More specifically, it refers to the SYNTAGMATIC result of such a process, a particular type of construction (a construction type or pattern) being defined as a sequence of units which has a FUNCTIONAL identity in the grammar of a LANGUAGE, such as SUBJECT+VERB+OBJECT (with reference to CLAUSES), or DETERMINER+NOUN (with reference to PHRASES). Most specifically, it refers to a token of a constructional type, in the sense of STRING, e.g. the + man + is + walking. It is constructions of this last kind which are analyzed into CONSTITUENTS, as in IMMEDIATE-CONSTITUENT analysis. Constituent forming a syntactic relationship are said to be 'in construction with' each other.(Crystal, 2003:102)

Crystal (2003) の定義では、Construction は、文法単位（文）の内部構成の全体的過程を指し、一

連の規則の適用による一連の形態素で作られ、主語+動詞+目的語（節）、限定詞+名詞（句）のような機能的同一性をもつ一連の構造型のことである。例えば、the + man+ is + walking のような記号列における構造型である。また、直接構成素分析における構成素の構造型でもあり、統語関係を構成する構成素は、お互いに「～と構造をなす」（in construction with）と言われる。さらに、Construction は、文の構造を公式的に示した構造型であり、伝統文法（O. Jespersen (1937) *Analytic Syntax* 参照）、構造言語学（H. A. Gleason (1961) *An Introduction to Descriptive Linguistics* 参照）の直接構成素分析における構造型、初期生成文法（R. W. Langacker (1969) 参照）の c-command（c 統御、構成素統御）に通じるものである。構文としての constructions については触れられていない。従来、Construction は、形式面を捉えた概念であり、意味の側面については十分な説明がなされていない。認知言語学の構文理論（Construction Grammar）では、Constructions は、特定の意味構造とそれに結合する形式とを併せたものが「構文」とされる。¹ 次に、上述の構文の定義を踏まえ、テーマである「the + 比較級 …（,） the + 比較級 …」構文を検討する。

3. 「the + 比較級…（,） the + 比較級…」構文の分析（伝統文法）

3.1 伝統文法における分析（1）E. Kruisinga (1931)

Kruisinga (1931:71) は、比較の用例として、対比比較、卓越比較、均衡比較、等級比較を取り上げ、均衡比較（Comparative of Proportion）は、対比比較が二つの平行する節で用いられ、同等割合で増減する二つの特性を対比させる機能を持つとする。形式面では、副詞句（adverbial）the が前につけられる。例文は以下である。

- (1) a. The more she thought of him, the sorrier she became for him.
(彼女は彼のことを考えれば考えるほどますます彼が気の毒になった)
- b. The more he contemplated the thing the greater became his astonishment.
(彼はその事をじっくり考えれば考えるほどますます彼の驚きは大きくなった)

3.2 伝統文法における分析（2）O. Jespersen (1933)

Jespersen (1933:225) は、比例比較構文は、程度（degree）の意味を表すための表現として、the … the が互いに依存しながら、二つのものが平行して増加することを表すために使われる、とする。後半部の the は、that の古い具格（instrumental case）の形で、「それだけ多く」を意味する。普通、条件を表すものが、結果となるものの前に置かれる。

- (2) a. The more he reads, the less he understands.
(彼は読めば読むほど分からなくなる)
- b. The longer he stayed, the more sullen he became.
(彼は長く居れば居るほど陰鬱になった)
- c. The noisier they were, the better was their mother pleased.
(彼らが騒がしければそれだけ母の方は満足だった)
- d. The more that was known about the incident, the most indignant people became.
(事件が明らかになればなるほど人々は憤激した)
- e. They liked the book the better the more it made them cry.

(本は泣かしてしてくれるものほど好きだった)

(2d) においては、that が条件節に挿入され、(2e) においては、条件節が後半部に挿入されている。Jespersen (1933) では、対象構文の意味を条件－結果、または、結果－条件として捉えている。Jespersen (1937) は、比例比較構文を次のように分析する。

(2)' a. The more we know, the more harm we can do each other

3 (3° OSV) O (32° 1) SVO (S x) .

b. The older he grows, the more he drinks

3 (3° PSV) O (31) SV.

c. The better I know him, the more I love him

3 (4° 3 SVO) 43 SVO.

(2)'の数字、記号の意味は、それぞれ、1—Primary, 2—Secondary, 3—Tertiary, 4—Quaternary, c—Connective, q—Quantifier, S—Subject, V—Verb, O—Object (direct) , P—Predicative, x—Nexus-substantive, () —Particulars serving to explain the item immediately precedingである。

3.3 伝統文法における分析 (3) George O. Curme (1931)

Curme (1931:296-297) は、比例一致節 (clause of proportionate agreement) を表す接続詞として、as, according as, in degree as, in the same degree as, in proportion as, but as, except asを挙げ、その中に、具格相関接続詞 (instrumental correlatives) the—the を位置づけ、その簡潔さと効果的並行性を持つため多く用いられている、と述べている。さらに、この構文は、古英語の時代には、次の二つの形があったとし、次の例文を挙げている。

(3) a. This stone gets the harder *the longer it is exposed to the weather*.

b. This stone gets in that [degree] harder, in that [degree]: *it is longer exposed to the weather*.

(3a,b) のイタリック体は、従属節を表し、(3b) は (3a) の元の形で、(3a) の最初のtheは決定詞・限定詞 (determinative) , 二番目のtheは従属節を導く導入接続詞 (introductory conjunction) である。この従属節は、強調のため主節になるとし、次の例文を挙げている。

(4) a. *The more money he makes* the more he wants.

b. *In that [degree]:he makes more money*, in that [degree] he wants more.

(4a) の最初のtheは、決定詞で直後の従属節を指し、2番目のtheは指示詞 (demonstrative) で先行する従属節を指示する。(4b) は (4a) のパラフレーズである。

3.4 伝統文法に基づく分析 (4) 渡辺登士 (1987)

渡辺登士 (編) 英語語法活用大辞典によれば、the + Comparative... (,) the + Comparative...構文は、以下のように分析される。

(6) The older he grows, the more he drinks.

(6) は、後半部の節がリズムの関係で、(7) のように“V + S”に倒置することがある。

(7) The less distinct the message was, the more beautiful is often the speech in which he proclaims it.

(8) The better workman, the worse husband. [ことわざ]

(8) の the + Comparative は、副詞類であると同時に形容詞類としても働く二重の役を担うことがあ

り、これを不可として、The better the workman, the worse the husband. に改めるのが良いという意見もある、と指摘している。また、簡潔な表現やリズムの関係で“the + Comparative + n.”の表現も認められるとし、次の例文を挙げている。

(9) *The more expensive a school is, the more crooks it has.*

以上、比例比較構文の伝統文法による分析と伝統文法に基づく分析の文法的説明を見てきた。² これをまとめると以下の2点に集約できる。

① the...the... 構文における the は定冠詞ではなく、OE の具格の指示代名詞 *þu* に由来するもので、従属節の the は関係副詞 (= in what degree)、主節の the は指示副詞 (= in that degree) である。(安藤貞雄『現代英文法講義』開拓社,2005,p.571)

② the...the... 構文は相関的従属語 (Correlative subordinators) の一つであり、二つの状況における比例関係を表し、次のような機能分析がなされる。

The later you arrive [A S V], the better the food is [Cs S V].

The more you tell him [Od S V Oi], the less notice he takes [O d S V]

(A Adverbial, S Subject, V Verb, Cs subject complement, Od direct object, Oi indirect object)

(Quirk, R., S. Greenbaum,, G. Leech and J. Svartvik (1985) , *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman. p.463)

4. 「the + 比較級… (,) the + 比較級…」構文の分析 (アメリカ構造言語学)

アメリカ構造言語学者 Eugene A.Nida (1960) は、比例比較構文は格言的表現 (aphoristic expression) であり、Major Sentence Types ではなく、Minor Sentence Type に分類し、以下の例を挙げている。

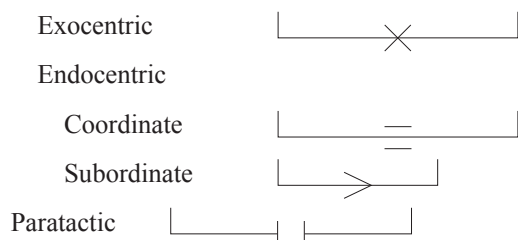
(1) The rougher the way, the better we like it.

(2) The more they came, the more the people shouted.

(3) The more I think of it, the less I approve.

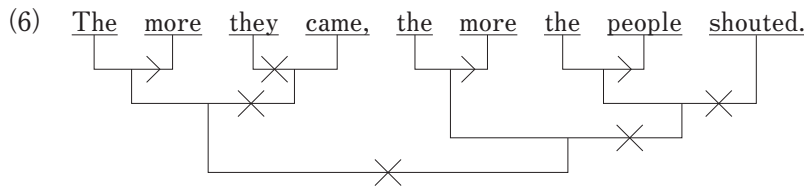
Nida (1960) は、上記比例比較構文が Well begun half done. Old saint young sinner. No pains no good. Like father like son. So far so good. First come first served. などの格言との類似性から、格言的表現に分類している。Nida (1960) の統語分析は、従属関係 (Hypotactic) と並列関係 (Paratactic) を捉え、従属関係は外心構造 (Exocentric) と内心構造 (Endocentric) に区分し、さらに内心構造は等位構造 (Coordinate) と従属構造 (Subordinate) に区分される。それぞれの構造は以下のように図示される。

(4) Hypotactic



上述の統語分析によって、格言的表現である The more the better. は以下のように分析される (Nida, 1960:7)。(6) は、(5) の分析を基に、筆者が分析したものである。

(5) The more the better.



Nida の分析では、The more the better. の前半部 the more と後半部 the better との関係を外心構造としている。外心構造は、語群がその中の中心語 (headword) と異なる機能を持っている場合を指すが、上記前半部と後半部は従属関係にあると考えられる。筆者は、比例比較構文は、主節—従属節か従属節—主節からなる構文であると考えられる。(6) では、(5) に従って前半部、後半部の関係を外心構造とする。アメリカ構造言語学では、周辺的存在の比例比較構文は言語分析の対象として、ほとんど取り上げられていない。Hockett (1958:213) は、The more the merrier. を屈折句 (inflectional phrases) の一例として挙げている。

以上、アメリカ構造言語学における Nida (1960) の比例比較構文は、<格式体>であることを前提に、内心構造、外心構造によって分析が行われた。これをまとめると以下の2点になる。

- ① 比例比較構文は、接続詞を用いなくて、二つの文を並列 (Parataxis) によって生じたもので、リズムがある。
- ② The more the better. The sooner the better. The more the better. など格言的表現が多い。³

5. 「the + 比較級… (,) the + 比較級 + …」 構文の分析 (生成文法)

筆者の知る限り、生成文法で最初に、比例比較構文を扱ったのは Ross (1967) である。その後、McCawley (1998), Fillmore, Kay and O'Connor (1988), Culicover and Jackendoff (1999) が独自の分析を行っている。

5.1 生成文法による分析：Ross (1967)

Ross (1967:223,1986:24) は、比例比較構文が、島の制約である複合名詞句制約 (Complex NP Constraint=CNPC)、等位構造制約 (Coordinate Structure Constraint=CSC)、文主語制約 (Sentential Subject Constraint=SSC) を受けやすいということを示すために、以下の言語事実を挙げている。

- (1) The more contended we pretended to be, the more angry we grew at the doctors.

(我々が多く満足しているふりをすればするほど、ますます医師たちを怒った)

- (2) ?The more contended the nurses began to try to persuade us to pretend to be, the more angry we grew at the doctors.

(1) を深層構造から派生するためには、(2) が示しているように、変項 (variable) を使用しなければならない。また、比例比較構文は、上述の島の制約を受けることを以下の例で示している。

- (3) a. *The more contended I laughed at the nurse who thought that we were becoming, the more angry we grew at the doctors.

b. ?? The more contended the nurses began to believe (*the claim) that we were going to pretend to be, the more angry we grew at the doctors.

- (4) * The more contended we pretended to be better fed and, the more angry we grew at the doctors.

- (5) a. *The more contended for us to pretend to be become possible, the more angry we grew at the doctors.

b. ? The more contended it became possible for us to pretend to be, the more angry we grew at the doctors.

(3)～(5)は、それぞれ、比例比較構文が CNPC, CSC, SSC の制約に抵触していることを示しているが、なぜ制約違反があるのかについての説明は省略する。ここでは、Ross (1967) が Wh- 副詞類節 (Wh-Adverbial Clauses)、分裂・疑似分裂文と話題化文 (Cleft, Pseudocleft, and Topicalized Sentences)、接続詞縮約 (Conjunction Reduction)、動詞句前置 (VP Preposing) などと同様に、比例比較構文の様々な振る舞いを定式化するために、通例、X,Y,Z などの記号で表される変項が必要になる。この構文自体の生成文法的分析は、MacCawley (1998) によってなされている。

5.2 生成文法による分析：MacCawley (1998:731-736)

MacCawley (1998) は、比例比較構文を比較文や条件文との平行性から比較条件文 (Comparative-conditional sentences, CC 文) と呼び、以下の例文を挙げている。

(6) a. The longer Bill had to wait, the angrier he got.

b. The more absurd the candidates' claims were, the sillier the reasons were that they gave for them.

c. The more time I spend on a problem, the less I understand it.

(6) の特徴は、前半部と後半部に分けられ、前半部を条件節 (Protasis)、後半部を帰結節 (Apodosis) と呼び、条件節が帰結節の修飾節になり、帰結節がこの構文の主節 (Main clause) になる。条件節と帰結節は、変更可能な語順をもち、両方の節が従属関係にあることは、(7) のように逆行代名詞化 (Backward Pronominalization) が可能であることによって証明される。

(7) a. The longer he_i had to wait, the angrier Bill_i got.

a'. If he_i had to wait long, Bill_i got angry.

b. The more money she_i earned, the more secure Joan_i felt.

MacCawley (1998) は、CC 文の条件節における will, than 一句、縮約形、that や関係詞との共起についての統語的文法性の可否について、以下の例文を挙げている。

(8) a. The faster you (*will) drive, the sooner you'll get there.

a'. If you (*will) drive fast, you'll get there by 2:00.

(9) The longer Bill has to wait (*than he thought he had to) , the angrier he gets (*than he was) .

(10) a. The richer your parents (are) , the better your chances (are) .

b. Your chances are/* θ better the richer your parents are/* θ .

c. The more obnoxious Fred is/* θ , the less attention you should pay to him.

(11) a. The more people (who/that) you offend, the more trouble (that/*which) you can expect.

a' The more people you offend, the more trouble you can expect.

b. The more people to whom you give offense, the harder a time you'll have.

c. The more worried he got, the more coffee (that/*which) he drank.

以下は、例文 (8) ～ (11) に対する MacCawley (1998) の説明である。

(8a) は、CC 文の条件節における will が、(8a') の条件文と同じように、挿入されると非文法的になる。(9) は CC 文のいかなる節も than- 句を取ることはできない。これは CC 文全体からすでに了解されているので than 句を付加すると意味的冗長性を持つからである。(10) の

連結詞 be は、通常の語順では省略可能であるが、(10b,c) の変更された語順では連結詞 be が省略されると非文法的になり、容認性が低くなる。また、連結詞 be の意味が特定のではなく、総称的である場合には省略される。(11a) は、(11a') The more people you offend, the more trouble you can expect. の拡張された構文であるが、(11a') は、前半部 You offend more people、後半部 You can expect more people からなるが、どちらも縮約形を持たない。who や to whom を含む (11a,b) の条件節は、一見、関係節のように思われる構成素を含んでいるが関係節の外に動詞を持っていないので、条件節は、“The more people there are who/that you offend” の縮約形として解釈される。しかし、帰結節は、“the more trouble there is which/that you can expect” の縮約形とは考えられない。後者の場合、広いスコープを持ち、“the trouble in question already exists rather than that it will come into existence if you offend more people than you already have” と解釈すべきである。(11a,c) の帰結節における which は、制限的用法であるので省略できない。(MacCawley,1998:735)

以上、比例比較構文の様々な統語操作による事例を中心に構文論を展開する MacCawley (1998) を見てきたが、比例比較構文の核とも言える典型例から、それを統語論的に拡張した例までを混在させて論じることは、比例比較構文の特徴を複雑化し、説得力に欠けるといわざるを得ない。また、比例比較構文の文法性、容認性の判断を個人の言語直感に依存していることも問題点として指摘できるであろう。

5.3 生成文法による分析：Fillmore, Kay and O'Connor (1988)

Fillmore, Kay and O'Connor (1988) は、the X-er the Y-er の例として、次の (12) (13) を挙げている。

(12) The more carefully you do your work, the easier it will get.

(13) The bigger they come, the harder they fall.

(12) (13) の構造は、独立変項と従属変項との相関関係を表すために用いられ、この統語的表示は図1である。

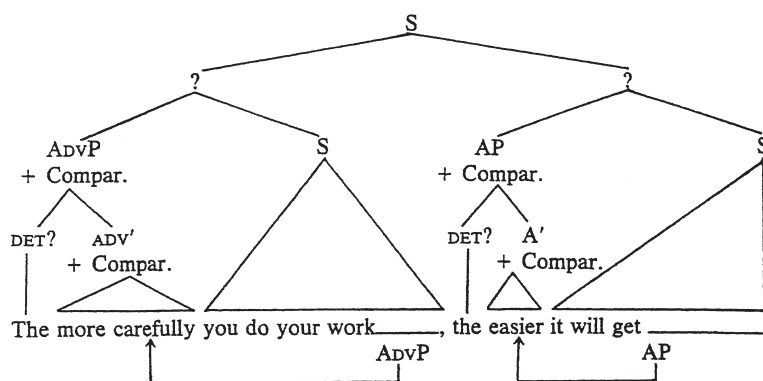


図1 Fillmore, Kay and O'Connor (1988) による比例比較構文の統語表示

図1の程度表現 the more carefully は、you do your work — と切れ目を持ち、程度表現 the easier は、it will get — と切れ目を持ち、その意味解釈は、'The degree to which you do your work carefully will determine the degree to which you work gets easy' となる。彼らは、この構造における定冠詞は、一般に、

他の言語には見られないこと、また、the で始まる句を結合する二つの構造は、英語における標準的な統語形式には見られない特異な構造であることを指摘している。また、図1で表示されているように、the は定冠詞なのか、the は何とどのように結びついているのか、前半部、後半部の構成素構造は何か、構成素は the more carefully、more carefully、carefully なのか、また、その際どのような統語範疇なのか、という問題点が提起されているが詳細は明確にされていない。

5.4 生成文法による分析：Culicover and Jackendoff (1999)

生成文法における比例比較構文は、言語の「核と周辺」問題における周辺の具体事例として扱われることがある。Culicover and Jackendoff (1999) の論文テーマ "The View from the Periphery: The English Comparative Correlative" (「周辺からの眺め：英語比較相関構文」) は、まさにこの事実を具現化したものである。以下、英語比較相関構文 (English Comparative Correlative Construction: ECCC) の概要を見てみる。ECCC の特徴として、X-bar 理論での S' が COMP (=C) を主要部とする最大投射 CP (complementizer phrase) と分析され、文中での埋め込みが可能であること、さらに ECCC のそれぞれの節は、通常の高距離依存性 (long-distance dependency) を示すことが挙げられる。

(14) The more you eat, the less you want.

(14) の前半部と後半部の二つの節関係は、統語的には並列的に結びついているが、同じではない。前半部は従属節で、後半部は主節である。ECCC の基本的配列は、以下のように表すことができる。

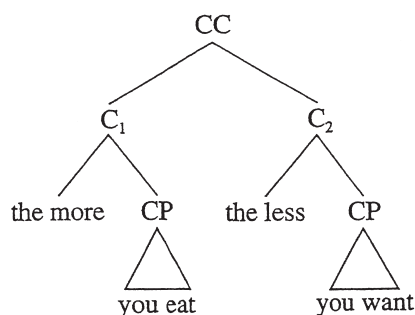


図2 Culicover and Jackendoff (1999) の ECCC 基本配列

図2において、CP は you eat, you want を支配する。この事実は、補文標識 (complementizer) の that がどちらの節においても起こっていることによって明らかである。

(15) a. The more (that) you eat, the less (that) you want.

b. The angrier (that) Sue gets, the more (that) Fred admires her.

さらに、Culicover and Jackendoff (1999) は、ECCC が完全にイディオムの範疇、CC=IP (Inflectional Phrase) であり、補文構造の中に挿入されることを以下の例で示している。

(16) a. I think that the more you eat, the less you want.

b. I'm not shocked by the idea that the more you eat, the less you want.

c. It is obvious that the more you eat, the less you want.

d. It is not entirely clear if/whether the more you eat, the less you want.

e. I want to explain exactly why the more you eat, the less you want.

ECCC が IP あるいは CP であると仮定するならば、その内部構造については、次の5つの仮説が可能

であるが、主要な可能性を持つのは仮説 A,B である。[] は具体的内部構造である。下線部は主節 (main clause) である。

(17) 1. 仮説 A (並列仮説) – C₁ と C₂ は IP 又は CP からなる並列節 (paratactic clauses) である。

[IP/CP[C₁ the more you eat][C₂ the less you want]]

2. 仮説 B (左従属仮説) – C₂ は主節、C₁ は左付加語 (adjunct) である。

[IP/CP[C₁ the more you eat] [IP/C₂ the less you want]]

3. 仮説 C – C₁ と C₂ は、空接続詞 (empty conjunction) によって接続されている。

[IP[IP/C₁ the more you eat] Conj [IP/C₂ the less you want]]

4. 仮説 D – C₁ は主節、C₂ は右付加語 (right adjunct) である。

[IP/CP[IP/C₁ the more you eat] [C₂ the less you want]]

5. 仮説 E – C₁ と C₂ は、空主要動詞 (empty main verb) の項 (arguments) である。

[IP[C₁ the more you eat] I [VP V [C₂ the less you want]]]

仮説 A の C₁ と C₂ は、X_{bar} 理論の視点から見ると変則的で、並列的に特異な配列を持つ二つの主節からなる。一方、仮説 B の C₂ は主節、C₁ は左付加節 (adjunct) であり、標準的構造を持つと考えられる。(Culicover and Jackendoff, 1999:547)

仮説 C については空接続詞の導入、仮説 D は仮説 B の鏡像関係、仮説 E は空 I,V の導入などに問題を持ち、支持されない。Culicover and Jackendoff (1999 : 548-553) は、仮説 A,B を支持する多くの統語的証拠を挙げているが詳細は省略する。重要点は、ECCC では C₂ が主節で主節力 (main clause force) を持つこと、そして C₁ が従属関係を持つことである。

ここで、「主節力」とは何かの疑問が出てくるが詳細な説明はなされていない。生成文法の説明方法は様々な統語的操作 (受動化、付加疑問文化、接続詞 that 導入、抽出化など) の適用の結果、文が文法的か非文法的かを判断することによって、仮説を検証する立場をとるので、統語論の形式主義には限界があると言わざるを得ない。もっと意味論に踏み込んだ説得力のある説明が求められる。本稿では、次節で比例比較構文を認知言語学の立場から説明を行い、結論を述べることにする。

Culicover and Jackendoff (1999) の比例比較構文に対する研究成果の一つは、比例比較構文が持つ特異性と一般性を指摘したことである。これを図示すると図 3 になる。

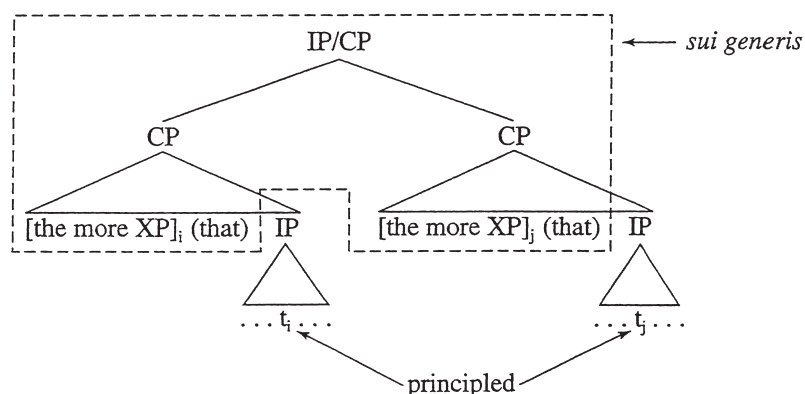


図 3 Culicover and Jackendoff (1999) における比例比較構文の特異性と一般性

図3の点線部分はこの構文の特異性 (sui genesis) を表し、図中の t_i と t_j が一般性を表している。Culicover and Jackendoff (1999:566) は、図3の問題点を二つ指摘しているが、詳細は不明であると述べている。ここで問題点だけを示すと、一つは、比較比例構文が島 (island) となる間接疑問文や自由節のような複雑な構文で抽出が可能になるという英語の特異性を他の言語で見つけることが難しいということである。二つは、比例比較構文における C_1 と C_2 を区別する「主節力」という概念が、統語論上の問題ではなく、意味論上の問題であるということである。なお、「主節力」とは何か、については、明確な定義がなされていないが、意味上の問題と考えることは妥当である。従って、「主節力」なる用語を用いて比例比較構文をこれ以上、生成文法では説明することができない。従来、生成文法においては、「主節現象」(main clause phenomena) として、「主節」が用いられてきたが、比例比較構文における「主節力」とは異なる。

以上、生成文法の立場から比例比較構文を見てきたが、この構文の分析には生成文法の言語観が如実に現れている。次に、生成文法の言語観と相対するものとして、今日、注目されている認知言語学の言語観から、比例比較構文を見ることにする。

6. 認知言語学による分析：構文文法⁴

6.1 認知言語学の基本的言語観

今日、認知言語学の言語観については、様々な文献で散見することができる。(山梨:1995,2000,2003,2004,2009 など) 認知言語学のパラダイムは、従来の生成文法のパラダイムとは、逆の立場を取り、様々な言語現象の取り扱いに異なった分析がなされている。

「構文」は、Goldberg (1995) の定義に基づき、構文の構成要素の意味の総和からは予測できない形式と意味の対からなる構成体 (construction) である。(Goldberg,1995,4) Goldberg (1995) による構文の定義は以下である。

C is a CONSTRUCTION iff_{def} C is a form-meaning pair $\langle F_i, S_i \rangle$ such that some aspect of F_i or some aspect of S_i is not strictly predictable from C's component parts or from other previously established constructions.

(ある言語表現Cが形式と意味の対 $\langle F_i, S_i \rangle$ を構成し、 F_i のある側面あるいは S_i のある側面が、Cの構成部分から(あるいは既存の確立した構文から)厳密に予測できない場合(しかもその場合に限り)、Cは「構文」(construction)とみなされる)

認知言語学の枠組みでは、構文という概念は、いわば、統語形式の内部に自己組織的な固有の意味を内包する言語単位として捉えられる。換言するならば、認知言語学の枠組みでは、(構文は文法規則に基づく統語計算の随伴現象でしかないという生成文法の立場に対し) 構文という単位自体に、その構成要素の総和からは予測できないゲシュタルト的な意味を認める立場をとる。(山梨,2009:156) 従って、比例比較構文に関する分析は、ゲシュタルト心理学における図・地の分化によって説明が可能である。図・地の分化については、概略、次のようにまとめている。

一般に、外部世界は、われわれの前に客観的な存在として直接的に立ち現れてくるわけではない。われわれが外部世界を知覚する場合、外部世界のある部分は背景化し、他の部分は前景化されて立ち現れる。換言するならば、外部世界は、何らかの形で前景 (foreground) と背景 (background) に分かれて、われわれの前に出現する。図 (figure) と地 (ground) の観点からみるならば、外部世界は、前景としての図と背景としての地への分化の認知プロセス (すなわち、図・地野分化の認知プロセス) を介して知覚される。図/地の分化は、外部世界を構成する対象物の認知に関してもあてはまる。基本的に、われわれがある対象を把握していく場合、その対象の際立った部分に焦点をあてながら認知していく。この場合、際立っている部分 (ないしは焦点化されている部分) は図、その背景になっている部分は地として区分される。(山梨,2004:138)

6.2 比例比較構文における Figure と Ground

Figure と Ground の概念は、複文構造をなす分詞構文において、分詞句の部分が Ground となり、主節を Figure として際立たせることが明らかにされている。(早瀬 2002:149-192)⁵ この事実は複文構造をなす比例比較構文にも当てはまる。既に、生成文法による分析で見たように、比例比較構文における前半部は従属節、後半部は主節である。この場合、従属節は Ground となり、主節は Figure として際立ち (salience) を持つことになる。例えば、5.4 節 (14) の前半部 The more you eat は、従属節で Ground となり、主節に対する前提になる。後半部 the less you want は、主節で Figure として際立ちを持つ。次の (1b) は、(1a) を逆にした場合であるが非文法的文になる。

(1) a. The more you eat, the less you want.

b. *The less you want, the more you eat.

(1) の比例比較構文の特徴は、Figure と Ground の関係を持つだけでなく、並列関係をも持っている。比例比較がなされる場合、並列関係が基準とならなければ比較はできない。これは天秤 (てんびん) が中央を支点とする枱 (てこ) を用いて、質量を測定するのと似ている。従来、前半部の the は、関係副詞と呼ばれ、後半部の the は、指示副詞と呼ばれたが、これまでの考察から、前半部、後半部の the は、定冠詞として捉え、前半部の the が前提、後半部の the は、その前提を指示する機能を持つと考えたほうが明瞭でわかりやすいと考える。⁶ 比例比較構文は、我々がもつ基本的認知能力である定着 (entrenchment)、抽象化 (abstraction)、比較 (comparison)、合成 (composition)、連合 (association) などの認知能力の一つであり、比例比較は、比較能力の一つである。比較の認知プロセスについて、山梨 (2009) は次のように述べている。

比較の認知プロセスは、基本的に、二つの構造を比較 (compare) し、両者の間の相違ないしはズレを認識していくプロセスである。比較は、一方の構造が比較の基準 (standard)、他方が比較の対象 (target) となる非対称的な関係から成る。(山梨,2009:130)

7. おわりに

本稿では、人間の基本的認知能力の一つである比較能力の言語化である比例比較構文について、伝統文法、アメリカ構造言語学、生成文法、認知言語学（認知構文論）における実例とその文法的説明について、時系列に検討してきた。伝統文法では、Kruisinga (1931) が比較の用例として、対比比較、卓越比較、均等比較、等級比較の言語事実を採り上げ、安藤貞雄 (2005) は、比較構文の諸相として、同等比較、優勢比較、劣勢比較、比例比較、漸層比較、疑似比較を採り上げている。Kruisinga (1931) から安藤貞雄 (2005) までの比較構文に対する考え方を見ても、比較に対する概念把握に関して大きな相違は見られない。比例比較構文は、周辺的な言語現象であるけれども、人間の基本的認知能力の一つである比較能力を言語化したものであり、人間言語の本質を知る重要な手がかりを与えてくれる。比例比較構文については、さらに、詳細に検討しなければならない事項が多くある。比例比較構文カテゴリーのネットワークと拡張についての検討は今後の課題の一つである。

註

- 1 本稿で扱う構文 (constructions) は、構文理論として、1980年代から、カリフォルニア大学バークレー校の Charles J. Fillmore, Paul Kay, George Lakoff らを中心に発展した新しい認知言語学の文法概念の研究を最終目標とするが、現段階では、伝統文法、アメリカ構造言語学、生成文法における構文の扱いを通時的に概観する。
- 2 比例比較構文の伝統文法とそれに基づく分析は、わが国の英語教育でも多く注目される文法項目である。特に、the の文法的説明、二つの the の相違、節中にける that の文法的説明など、英語指導上の問題が現れる構文である。
- 3 The X-er the Y-er 構文の特徴の一つとして、格言的表現を指摘したのは Nida(1951) であるが、テイラー・瀬戸 (2008:348) は、格言的表現について次のように述べている。
『もうひとつの特徴は主動詞がしばしばない点であり、それゆえ時間を超越 (timeless) する。おそらくこのせいで、ぜんたいとして箴言のように響き、この限りで他の二肢構造を持つ表現とある程度親しい関係に立つ。例えば、out of the frying pan into the fire (フライパンから火の中へ)、Easy come, easy go.(楽に入るものは楽に出ていく、悪銭身につかず)、Penny wise (and) pound foolish. (一文惜しみの百失い) など。』
- 4 比例比較構文を構文として扱うことについての正当性について、大堀 (2002:125-126) は、Fillmore(1988) からの例文を引用し、比例比較構文の構造は複雑で、二つの尺度の相関を示した条件文であることを述べ、狭義の語彙知識や文法規則では捉えられない、文法を考える上で、こうした事実は「例外」ではなく正当な、説明すべき言語知識であり、新しいアプローチがそのためには必要になる、と指摘している
- 5 Figure と Ground による英語分詞構文の分析について、早瀬 (2002:155) は次のように述べている。
分詞構文は<同時性>を「2つの事態の時間的オーバーラップ」という形で表出する。そしてどちらを Figure あるいは Ground とみなすか、その表出の仕方には非対称性が見られる。一般に、アスペクト的に幅を持つ事態は Ground として分詞句に現れ、瞬間的・点的なアスペクトを持つ事態が Figure としてみなされる傾向にある。
- 6 比例比較構文における the…the の文法的説明で、前半部の the を前提、後半部の the を特定

のものを指示すると考えた理由は、定冠詞の意味的機能に拠っている。定冠詞は、概略、定性 (definiteness)、特定性 (specificity)、前提性 (presupposition) などの情報を担い、名詞を限定するという事実から導いた仮説である。なお、この仮説の具体的言語事実に基づく検証は今後の課題としたい。

文献

- 安藤貞雄. 『現代英文法講義』 東京：開拓社 .2005.
- Croft, William. *Radical Construction Grammar*. Oxford: Oxford University Press.2001.
- Crystal, David. *A Dictionary of Linguistics & Phonetics*. Fifth Edition. Blackwell Publishing.2003.
- Culicover, Peter W., and Ray Jackendoff. "The View from the Periphery: The English Comparative Correlative." *Linguistic Inquiry* 30:543-571.1999.
- Curme, George O. *Syntax*. Boston: D.C. Heath & Co.1931.
- Fillmore, Charles J., Paul Kay, and Mary Catherine O'Connor. "Regularity and idiomaticity in grammatical constructions: The case of *let alone*" *Language* 64:501-538.1988.
- Gleason H.A. *An Introduction to Descriptive Linguistics*. Rev.ed. New York: Holt, Rinehart and Winston.1961. (竹林滋・横山一郎訳『記述言語学』東京：大修館. 1970.)
- Goldberg, Adele E. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press. 1995. (河上誓作他(訳)『構文文法論』東京：研究社出版. 2001.)
- 早瀬尚子. 『英語構文カテゴリー形成 — 認知言語学の視点から』 東京：勁草書房. 2002.
- Hockett, C.F. *A Course in Modern Linguistics*. New York: Macmillan.1958.
- Jespersen, Otto. *Essentials of English Grammar*. London: George Allen & Unwin.1933.
- _____. *Analytic Syntax*. London: George Allen & Unwin.1937.
- _____. *A Modern English Grammar on Historical Principles. Part VII SYNTAX*. London: George Allen & Unwin.1949.
- ジョン・R・テイラー／瀬戸賢一. 『認知文法のエッセンス』 東京：大修館書店 .2008.
- 河上誓作(編)『認知言語学の基礎』 東京：研究社出版. 1996.
- Kruisinga. Etsko. *A Handbook of Present-Day English. Part II, Vol.2 English Accidence and Syntax* 1. Groningen : P. Noordhoff.1931.
- Langacker R.W."On pronominalization and the chain of command" in Reibel and Schane (eds.) 1969.
- McCawley, James D. *The Syntactic Phenomena of English*. 2nd ed, Chicago: University of Chicago Press.1998.
- Nida, E.A. *A Synopsis of English Syntax*. Norman :University of Oklahoma.1960. (大田朗訳注『英語シンタクスの概要』英語教育シリーズ8、東京：大修館. 1970.)
- 大堀壽夫. 『認知言語学』 東京：東京大学出版会. 2002.
- Quirk, R., S. Greenbaum., G. Leech and J. Svartvik. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.1985.
- Reibel,D and Schane (eds.) *Modern Studies in English: Readings in Transformational Grammar*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.1969.

- Ross, John Robert. *Constraints on Variables in Syntax*. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass. 1967.
- 渡辺登士 (編) 『英語語法活用大事典』 東京：大修館書店 .1987.
- 山梨正明 . 『認知文法論』 東京：ひつじ書房 .1995.
- _____. 『認知言語学原理』 東京：くろしお出版 .2000.
- _____. 「認知言語学」 『現代言語学の潮流』 山梨正明・有馬道子(編) 54-79. 東京：勁草書房. 2003.
- _____. 『ことばの認知空間』 東京：開拓社 .2004.
- _____. 『認知構文論－文法のゲシュタルト性』 東京：大修館書店. 2009.

On the English Comparative Correlative Constructions

TAKAHASHI Junichi

Abstract : The English comparative correlative constructions (e.g., The more you eat, the less you want.) have been treated as "peripheral" phenomena, not "core" in the modern English grammar. This construction is used for expressing a correlation between an independent variable and a dependent variable. This paper surveys some approaches to the comparative correlative constructions in traditional grammar, structural linguistics, generative grammar and cognitive linguistics. These constructions are assumed to reflect something fundamental and universal about the human capacity for language.